

八幡・西上浦の歴史(1)

ふるさとの歴史発見

染 矢 寛 二

(会員 佐伯市八幡)

JR佐伯駅から国道二一七号線を上浦方面に向かい、八坂トンネルを抜けると八幡・西上浦地区に入ってくる。まず目に入るのはセメント工場の高い煙突である。

現在は大正十五年四月より続く八三年間のセメント生産の歴史を終え、バイオマス発電所に業態を変えている。左手に高くそびえる彦岳を遠目に見ながら進むと、気が付いたら上浦の日豊海岸国定公園が目に入ってくる。この間、車でわずか五十分。ジョーヤラ・五丁の市で知られる大宮八幡神社と彦岳が有名であるが、それ以外に歴史のあることを知る人は意外と少ない。

しかし、結構有名人も輩出している。

ふるさとの歴史を再発見し小中学生にもわかりやすくまとめた。

一、「八幡」の由来。

なぜ八幡と呼ばれるようになったのだろう

現在「八幡」という住所は存在しない。郵便物を出しても宛先不明で戻ってくる。でも、しっかり「八幡地区」名は健在しており、小学校、公民館、農協、消防団に今もその名を残し生き続けている。名前の由来は明治二二年の町村制に伴う三村合併(戸穴村、海崎村、霞ヶ浦村)の際、村名に共通に信仰する大宮八幡神社の「八幡」を付けたことに始まる。約半世紀(五二年間)八幡村の時代が続いている。

八幡村の変遷を見ていくときに新たな発見があった。それは「大字」^{おおあざ}の名前である。特に深く考えず当たり前のよう^おに使用しているこの住所名にも歴史が存在している。

明治二二年、八幡村ができた時に大分県知事の名で発せられた、県令甲第一二二号「町村制施行に付、町村区域名称別冊の通相定、本年四月一日より施行す。但し旧町村名は大字としてこれを存す」による。「大字」は町村合併に伴ってできたものだった。八幡地区にとって大きな変革を遂げるきっかけは旧日本セメント工場の発展と大きな

国木田独歩も登った彦岳

日記「欺(あざむ)かざるの記」より

明治26年

11月18日(土曜日)

午後2時過ぎ、学校より帰って弟を伴ひただちに尺間山に向かう。山頂の宿に泊まる。

11月19日(日曜日)

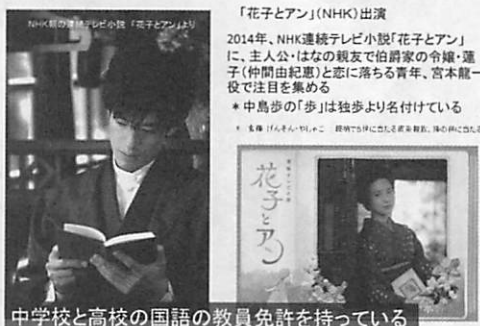
早朝(尺間山頂より)朝日の海面より昇るを見る。その美しいまだ見ざるところのものなり。この日彦岳にめぐり、一日を山より山の跋涉(ばっしょう・ふみ、わたるの意味)に暮らしぬ。霞ヶ浦に下りて帰宅す。



彦岳と東京スカイツリーは高さほぼ同じ



国木田独歩の玄孫・中島歩(俳優)

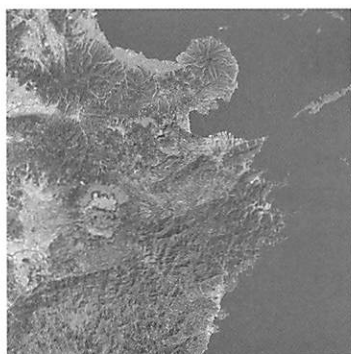


※国木田独歩の玄孫(孫の孫)にあたる人に俳優の中島歩さんがいる。

(NHK朝の連続テレビ小説・花子とアン二〇一四年に出演)。名前の歩は独歩からの通字か。中学校と高校の国語の教員免許を持っており(独歩は英語と数学)、独歩の血を引いている。

二、彦岳の中腹にある狩生鍾乳洞、石灰石の来た道
一億三千万年の旅

太古の昔、赤道付近に噴出した海底火山の周辺に珊瑚



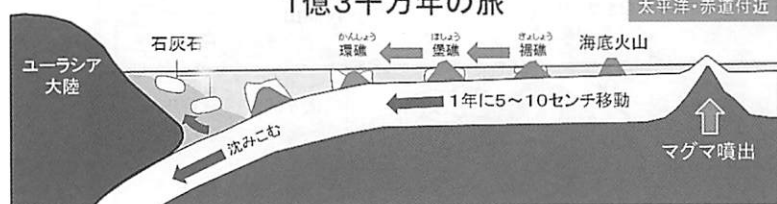
秩父帯（石灰石岩層）



石灰石の来たち

1億3千万年の旅

できた図鑑
(PHP研究所)より



海の中に火山島ができるとそのまわりにサンゴ礁ができます。海洋プレートと共に島が移動し、だんだん沈んでいくとサンゴ礁は上と外へ成長し、さらに島が完全に海に沈むと環礁となります。大陸の下に沈み込むとき表面がプレートからはがれ、大陸のふちに積みかさなって、やがて石灰岩になります。

礁が発達、1年に5〜10 cmの地殻変動で移動し1億3千万年かけてユーラシア大陸の下に海溝に沈み込んでいく。際表面のサンゴ礁などは剥がれ大陸に乗り上げてできたのが秩父帯石灰石岩層であり、現在、高速道路路から見える津久見の石灰石山はその一部露出部分である。

三、狩生鍾乳洞の生きものたちが教えること

九州と四国は陸続きだった

彦岳の中腹にある狩生鍾乳洞には珍しい生き物たちが生息している。

カリユウオニアリズカムシ、キュウシユウホラトゲ

トビムシ、ノムラメクラチビゴミムシ（洪積世：約一

六〇万年〜一万年以前前の古い姿を持つ生き物）

四国愛媛県東宇和郡野村町（現、西予市野村町）にある

鍾乳洞（羅漢洞）で

同種の生物（ノム

ラメクラチビゴ

ミムシ）が発見さ

れた。虫たちは豊

後水道を泳いで

渡っていけない

ため、日本列島形

成過程で九州と

四国は陸続きだ

ったことが証明

された。



四、平安時代創祀の大宮八幡神社と

五丁の市・ジョーヤラ

大宮八幡神社の創祀は、平安時代、大同二年（八〇七）と言われていますが、これは神社の棟札に大同二年の文字があつたことによる。大同年間に創祀された神社仏閣は全国でも多く、佐伯市内でも南海医療センター横の五所明神社も大同元年である。

七九四年、平城京（奈良）の強い仏教勢力（南都六宗）を離れ、平安京（京都）遷都後、二大仏教の一つ真言宗を弘法大師空海が立教開宗した年も。大同二年（諸説あり）であることが興味深い。

大宮八幡神社の祭り「五丁の市」は祭りの時に「市」が立ったためそう呼ばれている（マルミヤやユーマートがまだ無かった時代）。

私が小学生の頃は祭りも一週間あり（今は二日）五丁の浜は大漁旗で飾った船で一杯になり、遠くは佐賀関の方より来る船もあつたという。出店も七列程立ち並び、祭りが終わっても一週間位は出店が残っていた。都会に行っている子供たちも、盆正月には帰らなくても五丁の市には帰ってきていたという。

また祭り初日に行われるジョーヤラ（りよう「漁あれ」がなまった言葉）は。江戸時代、参勤交代のおりに佐伯の殿様が御船出、御国入りの際にジョーヤラで送迎したと言われています。

ジョーヤラ

佐伯の殿様が参勤交代で御船出、御国入りの際にジョーヤラで送迎したと言われています



五、大友宗麟と大宮八幡神社

大友興廢記に、天正二年（一九七四）四月、大友宗麟が佐伯領内の標野^{しめの}で狩猟したとき、前島（大入島）の那須の馬牧の由来について、

馬牧（うままき・馬の飼育場）



馬牧の由来について、八幡社神主（神志名氏）にたずねたことが記載してある。

それによると那須の^{まきわさ}牧長は八幡社に所属していたようで、毎年、新駒一頭が神馬として献納される慣わしであったそうです。

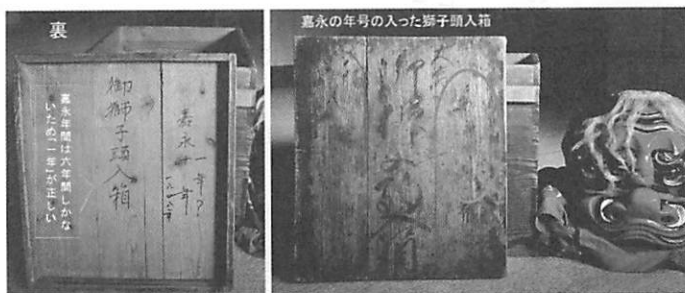


キリシタン大名
大友宗麟

六、五丁の市の獅子舞はいつから始まったか

祭りがいつから始まったかははっきり分かっていませんが獅子舞の始まりにはヒントがある。

江戸時代の幕末は疫病（赤痢、天然痘など）が流行している獅子は疫病退散の霊力があるため始まったのではないかと思います



戸穴地区には持ち回りで現在も使用している「獅子頭入れ箱」があり、随分薄汚れた箱ではあるがに墨書きで文字が書かれている。消えなかった箇所もある。

「嘉永元年」の文字が書かれていたようだ（裏にマジックで書かれている）

嘉永年間の有名な出来事に、嘉永六年「黒船・ペリー」が浦賀に来

航がある。この御獅子頭入箱と獅子頭はその五年前に造られていることになる。

獅子は疫病除けの霊力があり、本来「祀られる（動かない）」

存在だった。」そうだがいつの頃からか「舞」を舞うようになったとの事。(大分県の民俗芸能より)

七、藤原純友の乱(天慶の乱)と佐伯院

平安時代、東国の平将門たいしろうのまさかみの乱と時を同じくして、天慶四年(九四一)西国の藤原純友ふじわらのすみともの乱が起きた。

四国伊予国の役人として掾じようの位にあった純友は、任期が終わっても京の都に帰らず土着。海賊の首領になって南海山陽の国々を荒らしまわり、大宰府を襲撃したが博多津の戦いにて敗れ、伊予に逃れた純友は捕らわれ、のちに没する。残党となった次将、佐伯さへり是基これもとは日向の戦いで生け捕りになり、その後、賊首、桑原生行が佐伯院を襲うが打ち取られたとある(本朝世紀)(佐伯の地名が初めて歴史に登場する)

佐伯院とは、延暦十四年(七九五)郷ごとに一院を置くとの官符により設置された古代豊後四官倉(湯布院、安心院、野津院)の一つ。

その所在地はどこにあったのか、候補地は堅田地区(汐月遺跡)、弥生小倉地区、戸穴地区があげられるが最も有力地は堅田地区の汐月遺跡である。

佐伯市総合運動公園建設のための発掘調査で奈良時代後半(平安時代前期のものと思われる「吉」の文字の書かれた陶器が発見されたことによる。ただし断定はできないとの見解(汐月遺跡・教育委員会文化財調査報告書)

税(米)を貯蔵する官倉であるなら、その立地条件として①一番の米どころであること(柑橘に例えると、八幡地区は柑橘栽培の盛んな地域であるからこそ「柑橘選果場」が八幡地区に建った)②船の運搬に便利であること、があげられると思う。戸穴地区はその地形(土地の高低差大)から水路の土木工事も距離が短くて済み乾田に水を容易に引きやすいという利点がある。また海岸部に船蔵の地名もある。早くから稲作が行われていた地ではないでしょうか。

八、皇室に寄進された戸穴荘

藤原純友の乱(九四一)から二三七年後に戸穴荘の初見がある。

これは、八条院領目録、安元二年(一一七六)に智恵光院ちえこういん御荘(八条院とは鳥羽天皇の娘)に豊後の国戸穴荘と記されている。

この当時大流行していた寄進型^{きしんがた}荘園であり、開発領主により新たに開発され、荘園化した土地は、公験^{くけん}のないものは荘園整理令により没収の不安があった。

国司より位の高い皇室の土地とすれば、その心配は無くなるという考えや重い税負担を軽減できる考えから皇室に寄進する荘園が増えてきた。戸穴荘のこの一つである。

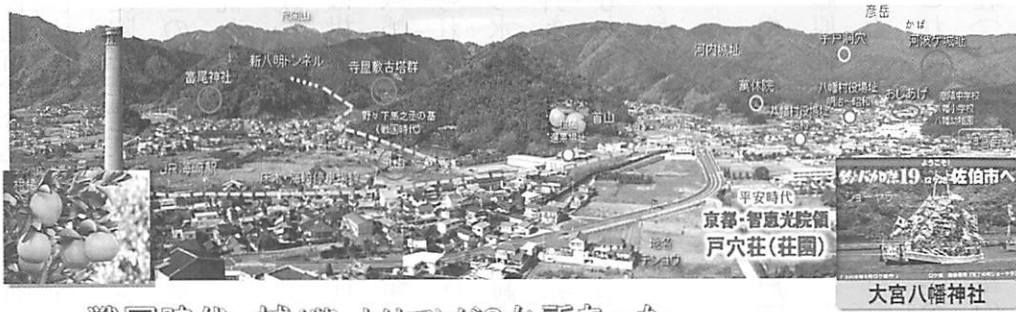
また、現在の戸穴地区には、荘園に関係のありそうな地名がある。名や中世の神事に関係のありそうな地名がある。

荘園に関係のありそうな地名として、庄作、門の内、屋敷迫が、中世の神事(流鏑馬^{やぶさめ})もしくは馬の調教場に関連する地名として、馬場、馬場の前、馬場の脇、馬場の後、的場等が残されている。

その他アゼチ(庵室・按察使)、阿弥陀堂の地名がある。これらは願成寺^{がんじょうじ}または萬休院^{ばんきゅういん}周辺に集中していることから戸穴荘の中心は当地であると考えるのが自然である。

八幡地区・歴史発見

2016年 八幡小学校「探検クラブ」資料・八幡歴史学研究会



戦国時代、城(砦・とりで)が2か所あった

写真は河波ヶ城址から見える佐伯湾

蒲戸崎が見える

大入島



八幡地区小字名地図

* 荘園に関係があると思われる地名が今も残っている

作成・八幡歴史学習会 2016年

